小田原俳句協会報

理事会だより（2・9）

一、池田会長より、梅まつり俳句大会実施を再出発点として非日常を脱して各大会へ取り組みたい、と挨拶。

二、立春青空句会の短冊吊し・句会の実施報告。短冊は広範囲の梅の木に吊した方がいいとの意見あり。（事業部）

三、梅まつり俳句大会実施報告を受け、今後に向けて受付時間短縮策、室温調整、短冊への記名など意見交換を行った。（事業部）

四、桜まつり俳句大会（四月二日）日の役割分担など細部につき説明、生花は今後取りやめに。（総務部）

五、定期総会の理事宛案内ハガキ配布、各部からの大会議案書は2月末迄に提出（総務部）。

理事会日程　4／13　総会4／27　5／11
（毎月十五時開催）

「俳句おだわら」10句抄（666号より）

小澤純子　抄出

函南と丹沢つなぐ冬茜　山﨑　悦子
目覚むれば障子明りと沢音と　肥後ちさこ
開け閉ての指のたをやか白障子　陌間みどり
清拭の湯気の優しきクリスマス　菅野　英余
叔父逝きし朝や大きな冬の虹　守屋　まち
冬田道星は無音のこゑ降らし　古屋　徳男
酒蔵は夕日まみれや寒の水　村場　十五
節太の指は人生柚子の風呂　中村　昌男
冬晴やトランペッター海に向く　新井たか志
月明の修羅道を行く他は無し　佃　悦夫

杉崎せつ　抄出

頃合ひの石頃合ひの冬日向　長谷川きよ志
甲州の風の筋みち柿簾　田中　幸子
櫓の音に水の近江の秋深む　加藤　富江
日の暮れは人声恋し煮大根　加藤れい子
清拭の湯気の優しきクリスマス　菅野　英余
養生やしんと日差しの冬田の面　百川　秀子
一駅を歩き十年日記買ふ　米山　翠
諸々のことを忘るる柚子湯かな　岩本ひさみ
夜の雲高層階の火事に照る　畠　梅乃
着ぶくれて子は泣きながら国逃る　大佐田うづき

第59回小田原梅まつり俳句大会

事前投句の兼題「梅、日脚伸ぶ」に対し一五〇名四九八句、二月五日当日の部に六四名の参加を得て小田原市民交流センターに於て三年ぶりに開催した。

兼題入賞作品

神奈川県知事賞

石ころはきょうも石ころ日脚伸ぶ　須田　聡子

小田原市長賞

空はまだ鋼の硬さ梅の花　畠　梅乃

小田原市観光協会会長賞

日脚伸ぶ言葉捨てたり拾ったり　加藤かほる

小田原箱根商工会議所会頭賞

梵鐘の楕円の響き日脚伸ぶ　田畑ヒロ子

神静民報社賞

赤ちゃんは耳まで笑い日脚伸ぶ　豊田　幸枝

小田原俳句協会会長賞

曇る日は曇る明るさ梅真白　秋山かつ子

以下小田原俳句協会賞（二十位まで）

真っ直ぐに生きる身軽さ梅真白　中根登美子

縁側は昭和のサロン日脚伸ぶ　関根　洋子

白梅や人永らへて村老ゆる　長谷川きよ志

中村哲（て つ）さんは野の白梅の白だった　伊藤　道郎

野良にまだふたりの影や日脚伸ぶ　田中　幸子

梅の香や夜勤介護の窓灯り　黒元　勇

歩こうよおまけのやうな梅日和　田中　幸子

日脚伸ぶ動き始めた万歩計　杉本　久子

しがらみをゆつくり解く梅の宿　岩田かつ子

骨太に生きてみようか梅真白　山田　照子

日脚伸ぶ大地ゆっくり動き出す　杉本　久子

いちまいを出がけに羽織る梅見かな　池田　忠山

的を射る矢の音高し梅の花　野島　巧休

筆談の文字朗らかや日脚伸ぶ　菅野　英余

選者特選賞

（小田原俳句協会名誉会長）佃　悦夫特選

石ころはきょうも石ころ日脚伸ぶ　須田　聡子

（小田原俳句協会顧問）新井たか志特選

おだやかな風にこたえる梅一輪　片山千江子

（小田原俳句協会会長）池田忠山特選

日脚伸ぶ山並み紺をとりもどし　片山千江子

（春野代表）長谷川きよし特選

日脚伸ぶ犬も端坐の長話　木村美千代

（みなみ俳句協会代表）加藤かほる特選

白梅や人永らへて村老ゆる　長谷川きよ志

（山北町俳句協会代表）竹下由里子特選

甘納豆噛めばぽつぽつぽつぽつ梅　小澤　園子

当日題入賞作品（席題「鶯餅、春季雑詠）

小田原俳句協会会長賞

華やぎは散る時にこそ山桜　秋山かつ子

（以下二十位まで）

鶯餅掬み所のない話　伊藤はる子
鶯餅草の命を練りこんで　豊田　幸枝
少年の秘密基地けふ野火の中　西岡　青波
春北斗杓よりかけらを落つる湖　西郷　節子
うぐひす餅仏間に父も母もをり　小澤　純子
鶯餅根雪が少し残る町　加藤　三眠
絡まりし糸そのままに春たてり　日高　朝代
井戸槽に朝摘みの菜や春浅し　米山　翠
一湾に光溢れて春立てり　澁谷　徹
立春大吉てまり麩ぷくと浮きにけり　寶子山京子
制服のお点前清し鶯餅　武居裕美子
仮の世を生きて鶯餅を食む　中村　昌男
峡の宿うぐいす餅といふ馳走　鈴木　幸子
菜の花や話を溜めて娘来る　大澤　秀子
風が香を香が風さそい城は春　小野　菊土
鉋屑陽を巻き込んで春の立つ　田畑ヒロ子
めんどりの薄き瞼や春日向　新井たか志
ものの芽や過去が未来へ音返す　中根登美子
手に受けてやさしき重さ鶯餅　八城　湖楊

立春青空句会（令和五年二月四日）

立春を待っていたかのような暖かな日、天守閣広場に集合し、短冊吊しと吟行の後句会（於そびそ二宮）。参加十七名の一句は次のとおり。

（合点高点順）

春の立つ槙の捩れはまだ解けず　田畑ヒロ子
立春やいつもの檻にいつもの猿　寶子山京子
老梅の四股ふむような佇まい　石井千代子
立春や尾を振りさうな城のしやち　池田　忠山
春の立つ城の天地のはつらつと　近藤　久江
紅梅や我が魂に彩ありや　加藤かほる
寒明けの風直角に大手門　田中　幸子
梅真白地球をよごす戦かな　北村　文江
真っ青な天守の空や梅真白　中村　昌男
いなせな車夫梅の城跡へUターン　長谷川きよ志
春立つや住吉橋の黒擬宝珠　山田　照子
春あけぼのシーラカンスから還った　佃　悦夫
紅梅の一樹離れて咲く城址　村場　十五
梅の径ひとりの吾によく香る　須田　聡子
故郷は南と北に鳥帰る　小野　菊土
春の使者乳鋲（ちびょう）も揺らす城の門　佐々木重満
梅の香や前頭葉のクリーニング　岡本　史郎

「新作8句」鑑賞（一月号より各一句を鑑賞）

線香花火終らば堂々悪事せむ　　佃　悦夫

花火から悪事に移行する凝縮された句であろうか。五ミリにも満たない線香花火の火の玉を、落とさずにパチパチ花を咲かせるのは至難の業である。好奇心と緊張感は大であるその緊張感から解かれ、花火の後の闇を思うと、眼目である「悪事」に想像空間が広がる。この企みで「百物語」などを想像した。「花火」と「悪事」の緩急も魅力であった。（田畑ヒロ子）

遣羽根のときに富士越え筑波越え　　池田　忠山

誠に大らか朗らな新年句である。殊に中七から下五へ大胆に畳み掛けるリズムが秀逸。

さて問題は詠地である。順当ならば埼玉の富士見市辺りか、などと地図帳を拡げてみる。北は狭山・南は房総丘陵一帯か？待てよ、都心の高層ビルの屋上もあり得るぞ？と山座同定の楽しみが広がる。更に年少の砌、近所のお姉さんたちと墨で顔に○や×をつけては笑いころげた思い出もまた……。残しておきたい日本の風景である。（田下昌人）

鋭角に縄を操る雪吊師　　新井たか志

昨年の十月末、雪吊を期待して「兼六園」へ立ち寄った。「雪吊は明日から、今日準備を終えた」と雪吊師。見渡すと何本もの綱が一つに束ねられ、槍のごとく真っ直ぐに、立てられていた。当日は掲句の様に雪吊を完成させるのであろう。現地では見る事が出来なかったが、その場に立ち会えた様に感じ、嬉しくなった。（伊藤はる子）

不要不急の生きものやってる大旦　　大石　雄介

蛙や蜘蛛や蟷螂と同じこの自然界に生きている私達人間ですが、このコロナ禍の中、とうとう不要不急という生き物になってしまったのですね。このネーミングの的確さにまず惹かれました。それでいながら、上からの指示などいらんというシニカルな面も感じられて、思わずクスッと笑ってしまいます。

ちょこっと風刺のきいた雄介さんの句はとても魅力的です。何しろ凩だってキエフキエフと吹くのですから。（杉山あけみ）

春睡の目覚めて「今日も生きていた」　長谷川きよ志

ふわりふわりと夢の中をさ迷っていたのでしょうか。現実に戻って、さあ動き出さなければと思うのですが、「今日も生きていた」には、ちょっとした不安も感じられます。

朝目覚めて「今日は何曜日だろう？」と考えてしまう事はしばしばありますが…。明日の目覚めも同じようにやってきたならば、素敵な一句が生れて来そうな気がします。（岡田典代）

採れさうで採れぬ高さの烏瓜　　山田　照子

ハイカーが烏瓜を手にして帰る姿を見ました。そんな物は何処にでもと思って、いざ捜して見ると見つからない。そんな物の一つが烏瓜です。我家の隣の大農家の生垣にも毎年赤い実が成っていました。去年屋敷が無くなり、跡地（六百坪）に今年中に十軒の建売が出来るようです。ある事が当然と思う物が突然無くなると云う事を実感した去年～今年でした。掲句の烏瓜何時までも成っている事を願います。

（小野菊士）

メビウスの輪に乗り猫と冬に入る　　大石　和子

長方形の細長い紙を一八〇度捻って端と端をくっつけるとメビウスの輪ができあがる。紙の表をなぞっていくと裏になり、裏をなぞっていけば表になって、表と裏が同時に存在している不思議な輪っかに、驚かされ、虜になった幼いころの記憶がよみがえる。この句、まるでジェットコースターに乗ったかのようで、愉しくもあり、なにしろ趣向がおもしろい。猫のびっくり顔が目に浮かぶ。無限（∞）の形そのままに、四季は、いつまでも終りがない。

（小島ノブヨシ）

腹括りし女の強し水仙花　　芹澤　常子

この句の水仙はどこに咲くのだろうか。海岸近くの群生、庭の片隅、部屋の一輪挿し…腹を括って生きている女を象徴する水仙はいったいどこに咲くのか。水仙の香りに酔いながら考えた。そして、気づいた。咲いた所が咲いていく所。場所は問題ではない。この句の水仙も腹括った女もどこでも強く生きていける。なかなか腹を括れない私は水仙の香りとこの句から力をもらった。

（瀧本敦子）

俳句おだわら鑑賞

片野　秋子　（令和5年1月号）

こだわりを捨てて生きるや冬紅葉　瀬戸とみ子

こだわりは人それぞれ持合わせている。私もひとときき食器や食品にこだわった時期があったが度を超すとストレスにもなる。この掲句は紅葉に例えて俳句では秋の季語でも冬紅葉として立派な一句になっている。こだわりを捨てて生きるに通じ共感しました。まさに秋にこだわらない冬紅葉。

杉本　久子　（令和5年1月号）

切り貼りの鳥よ花よと白障子　青山　典子

子供の頃暮れになると、父の手伝いで障子紙をはがしたり、障子を洗ったりしたものだ。

父は丁寧に桟に糊をつけると、障子紙を上手に貼りつけていった。貼り替えられた障子を通して差し込む陽の光は、身も心も温かくしてくれる。そんな障子に切り貼りの鳥が飛び花が咲いている。何だか絵本の世界に引き込まれていくようだ。中七の「よ」の繰り返しがリズミカルで心地よくて、とても楽しい一句でした。

俳句おだわら（2・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（1・27）　久江報

冬鳥に陽のお曼荼羅湖耀る　足立　和子
函嶺の稜線尖る寒夕焼　川本　育子
吾が母校校歌校章梅かをる　高橋　小糸
錠剤を飲むひとつづつ日脚伸ぶ　山﨑　悦子
棲む水の水動かざり寒の鯉　近藤　久江

◆山北（1・26）　由里子報

年始会今日一日の大家族　和田恵美子
大寒や大売出しの旗の列　尾崎　幸子
お汁粉や私の座る椅子がない　中山　妙子
雪霏霏命ある者眠らせる　尾崎　竹詩
目玉焼に今日はケチャップ春隣　石田加津子
蝋梅や仏頂面のラーメン屋　竹下由里子

◆春野（1・15）　きよ志報

どんど果て水面に星をちりばめて　秋山　昇
ちらちらと屋台の灯雪が降る　伊藤はる子
賃餅も薄くなりにし代替り　内田知江子
ぼろ市の防空頭巾火の匂ひ　尾﨑　一夫
鷹の木が風に翻弄されてをり　瀬戸　悠
月冴えて天狗飛びさう杉木立　二見　和江
冬満月干支の兎が飛び回る　長谷川きよ志

◆みなみ（1・21）　かほる報

息災の便り添へたり冬林檎　斉藤　静
日向ぼこ天国というガラス窓　小瀬村信子
吟行の小さな日溜り梅真白　加藤　富江
悴みの手より渡さる火伏札　加藤れい子
寄せ鍋や手作り野菜真ん中に　加藤　健治
大寒を耐える花芽のいじらしさ　市川めぐみ
再会の握手は両手冬りんご　豊田　幸枝
冬は早朝明け行く空の茜雲　加藤かほる

◆沈丁（2・2）　寶子山報

回転ドアー吾より先に春の風　若村　京子
一日が言葉少なし春陽（ひ）まつ　柳澤ミサ子
春風や腰を伸ばして大欠伸　田中　惠一
きさらぎや手提げ袋の糸みどり　河本　純子
冴え返るついつい嘘を糸電話　瀧本　敦子
春風やいい靴はいていい所へ行かう　勝木　澄子
春風と時間旅行や駅舎カフェ　菅野　英余
母縫ひし糸の硬きを解（ほど）く春　髙井　幸子
冬晴れや廊下清めの白雑巾　片野　節子

縺れ糸解かぬもよろし涅槃西風　峯尾ユキエ
美容院出てくる先に春の風　河本チヨ子
糸舐めて針孔めがけ再トライ　清水美代子
地蔵待つ箱根板橋春の風　松下　俊之
亡き友の囁きに似た春の風　武居裕美子
春風やたんす一棹空にして　寶子山京子
悦女報
◆たけのこ（2・8）
寄せあって小さな命寒すずめ　徳田　公子
一枚の残りし葉をば守る裸木　三木　泰子
晩節はあるがままなり冬桜　久津間百合子
春耕の先へ先へと鳥の来る　小宮　早苗
亡夫の忌の家族十人布団干す　宮崎　悦女
幸子報
◆青梅（2・7）
春寒やかたこと取り出す一輪車　大塚　行人
衣更着の心かはきぬ八十路かな　湯本とし子
鎌倉や天下静まり春の海　加藤まり子
たわいなき石につまずき冬ざるる　久保寺トミ子
春隣何かはねたる鍬の先　田渕　令子
山笑ふ今日も半日さがし物　田中　幸子
◆香雨・梅ごち（1・15）　忠山報
ほどほどの幸のみ願ひ初詣　肥後ちさこ

わんぱくの口一文字筆はじめ　関戸わよこ
いくたびも立ちては座り初鏡　青山　典子
いま一度会ひたき友の賀状こず　門松　鳳文
絵馬掛に夢いつぱいの初詣　吉田　百代
寒中の小雨にけぶる天守閣　吉田　康雄
鳶の意気空へ漲る出初かな　陌間みどり
松が枝を驚かしたる出初かな　小澤　純子
一月も半ばの雨となりにけり　池田　忠山
◆こよろぎ（2・9）
つとむ報
黄昏の信濃の風や春隣り　板谷　雅泉
朝方の雨に青みて花辛夷　植松テル子
初場所や花と咲かせて塩を撒く　神山つとむ
秀泰報
◆おほゐ（2・8）
嬰児の手足のくびれ春うらら　中村　昌男
薄氷のとけゆく音に日のやさし　石井きよ子
遠き日や父の背を追い麦を踏む　二上　光子
鎮守森卯年の子等の鬼は外　廣田　悦子
足裏に音あそばせて薄氷　中根登美子
片意地の丸く解るる薄氷　高橋みどり
毛糸編む母に負けじと頑張る子　中津川晴江
百歳は未踏の沃野春再来　香川　花子

薄氷を踏む快感よ老境よ　加藤　春江
土くれを起こす一鍬春動く　石井千代子
薄氷に閉じ込められて朝の月　小野　菊土
泥水にありて濁らぬ薄氷　横塚　昌平
薄氷に戸惑う鳥の足運び　風間　秀泰

◆鷹（2・3）　十五報

出迎へはかぼちやのオブジェ春の海　青木　孝子
二重なる犬の巻き尾やうららけし　池田　令子
花びら餅出でて華やぐ座となりぬ　西賀　久實
愛猫の声も入りきし初電話　佐宗　欣二
春宵や港に近きネオン街　須田　晴美
初旅や全き富士を眼下にす　中田　笑子
冬日澄む富士を真面の太極拳　百川　秀子
重なりて牧へ散る牛息白し　山﨑美知子
舌甘く金平糖や山笑ふ　柏木　良花
トランジットに明かす一夜や初茜　庄司　下載
客仕度終へ身仕度や福寿草　瀬戸　りん
ひめしやらの木肌朱を増す霜夜かな　高橋久美子
ゆらぎ出る追焚の湯や小正月　中山智津子
棚の本並べ直すや春隣　齊藤　桂
朝月のふはりと白し冬菜畑　芹澤　常子
体操の合間の白湯や春近し　大木　敬子
酒匂橋渡る五百歩寒夕焼　大島美恵子
雪晴や卓に番茶の湯気の影　田下　昌人
井戸端の禿（ち）びし束子や春隣　中根　和子
寺しづか朝日を受けて氷面鏡（ひもかがみ）　加藤　幾代
山楂子（さんざし）の花朝髪（あさがみ）を見せぬ母　守屋　まち
三十三才にはかに篠の揺れにけり　米山　翠
初衣裳家族揃つて社まで　來田　新子
鳥帰る家の解体進みけり　大沢　年子
暖房の部屋にパン種働きぬ　片野　秋子
春夕焼改札を出て主婦の顔　小林　環
ひな祭蔵に奏づるカルテット　下平　美子
特養の待合室の雛かな　鳥海　壮六
梅林の声だつたのか墓所にをり　杉崎　せつ
猫の恋暮色ひたひた迫り来る　古屋　徳男
鷹鳩と化して改稿仕上げけり　村場　十五

◆実のり（2・16）　たか志報

夫入れる湯たんぽ抱え夢路かな　岩本ひさみ
面とれば父の笑顔や鬼やらひ　杉本　久子
下萌や遊具五色に塗り替へて　木村　幸枝
姿見のうすき曇りや春の雪　新井たか志

◆零（2・16）

人間の意のままならず恋の猫　史郎報
春だ春マンボウに乗り旅に出ん　青木たけを
花冷えや木々と私の生きくらべ　伊藤　道郎
野遊びは梅の花咲く曽我山へ　井上　良子
紅梅にこころ乾いてゆくばかり　川合　昌子
白梅や心の素足活き活きと　木村　和彦
寒紅梅師の手解（てほど）きのなつかしく　佐藤　正子
日脚伸ぶ気動車で行く吾故郷　中村　裕子
梅咲いて御殿場線はゆっくり目　野川木一路
　　岡本　史郎

◆草むら（2・19）

誘惑に負けて家出や浮かれ猫　重満報
首かしげ犬が聴いてる春の唄　石井　秀稀
てふてふが鋼のこゑす枕許　井上　和子
悲喜凾数積分すれば春の雪　佃　悦夫
　　佐々木重満

◆無所属

荒星の我も一つや誓子の忌　小林永以子
春近し膨らむ森の息遣ひ　一ノ瀬茂代
福助も小座布団にて年守る　畠　梅乃
子等の声枯野に色を加へたる　出澤　洋子
石鹸玉お玉じゃくしが生れさう　小島ノブヨシ
背伸びして吾が指を待つ夕土筆　木村美千代
着膨れて財布もぞもぞレジの前　蓑宮　わか
春の蚊やATMと人差し指　瀬戸　正洋
偕老の日々ははるかに草萌ゆる　須田　聡子
寒明やレンタルルームの重きドア　山田　照子
白菜割る芯に円空仏の笑み　田畑ヒロ子
春待ちて金婚の坂登り詰む　岩楯恵津子
風のごと伝える言葉冬荒野　穂坂志げる
ぶらんこがぎいと鳴きます生きたいと　山本　すみ
鶉には小鳥インフルエンザかな　大石　雄介
猪走るうぐいす餅のような山　大石　和子
人生に起承転結二月尽　小澤　園子
髪結いに卒寿の友や春一日　山口　千代
春隣亀首長く法の池　青木　勝子
経済も支那支那してて弥生かな　柴田　礼子
眉毛ととのえる青年ライラック　杉山あけみ
一番に顔出す勇気蕗のとう　岡田　典代
節分の運気アップの鬼も呼び　北村　文江
頬染めて猿早春の露天風呂　大佐田うづき
雪解けの音切望すウクライナ　木村予史重

新作５句

花　良

卒業や飼育うさぎの垂れし耳
進学や親父の船の大漁旗
馬の仔のたてがみの中風走る
タワマンも飛び越えそなり猫の恋
母となる娘を祝ふ雛祭

柏木　幾代

京旅に母の形見の春袷
青饅は父の好物下戸なれど
苺苗植ゑし大鉢吊しけり
ふらここや背中押す手をやはらかく
朝食の萵苣シャキシャキと口弾む

加藤　わよこ

片言につき合ふ縁や薄紅梅
鳥のごと枝垂桜の籠に入る
出棺を見送る空に花ふぶき
桜しべ降る路地裏の行き止まり
旧邸の玻璃戸ごしより竹の秋

関戸　ちさこ

おだやかに光ちりばめ海は春
春めくやパステル色のショーケース
雨音を聞くともなしに春の風邪
回覧を届けてよりの庭桜
ほどほどの幸こそ良けれ目刺焼く

肥後

小田原俳句協会　〒二五〇―〇〇一二　小田原市本町二―一三―二　池田　忠山方

新会員を募集しています
お知り合いをお誘いください。

〈小田原俳句協会のご案内〉

1、小田原俳句協会報を毎月発行し「俳句おだわら」欄にひとり一句が掲載されます。昭和四十一年に創刊され一回の欠号もなく本号で六六八号です。

2、合同句集を五年毎に発行し、ひとり二十句掲載（令和元年に第十二集）

3、俳句大会、吟行会の実施
○小田原梅まつり・桜まつり俳句大会等
○立春句会　○秋の吟行会
○小田原城天守閣前への会員俳句短冊の掲示

4、年会費　三千円（郵送の場合は別途郵送料）

入会の問い合わせ
○最寄りのグループ代表者等当協会会員
○総務部長（佐々木）○八〇―一二四七―八八七八

◆お詫びして訂正します◆

667号　11頁池田忠山さんの句（再訂正）
（誤）境内の伽藍といはず冬日向
（正）境内と伽藍といはず冬日向
12頁　峯尾ユキエさんの3句目
（誤）左義長の炎の向かふゆらぐ君
（正）左義長の炎の向かうゆらぐ君